

シリーズ 中学校武道

授業の充実に向けて

84

中学校武道授業の現状と課題、その対策 なぎなた

公益財団法人全日本なぎなた連盟 指導委員長 安井みどり

中学校保健体育の授業における武道必修化が実施されて4年目となったが、依然として採択される種目は、剣道・柔道が主流である。

男女共修が可能で、怪我のおそれがほとんどないという長所を備えている「なぎなた」であるが、採択する学校は少ない。国際化社会の中、日本古来の文化を「なぎなた」の所作や精神を通して学ぶことは生徒の将来にも有用であろう。

武道授業においての「なぎなた」採択実現に向け、どのような対策が必要か、考えたい。また、中学校武道授業指導法研究事業3回目・4回目の報告を併せて検証してみたい。

1 「なぎなた」採択の現状

平成24年度から中学校保健体育の授業における武道必修化が実施されて今年で4年目となる。

表1に示すように、「なぎなた」は年々採択数が増えているとはいえ、全体の1%に届かない状態である。

全国的には、当初より主要種目として位置づけられていた剣道・

柔道を採択する学校が多く、「地域や学校の実態に応じて、なぎなたなどの他の武道についても履修させることができること」という記述にとどまった種目にとつては難しい滑り出しとなった。

その中でも、「なぎなた」は認知度が低く、採択決定者や保健体育科教員にも理解されていないケースも多いため、採択に向けてまず「なぎなた」の説明から始めなければならぬのが現状である。

その結果、「なぎなた」の採択の学校は、従来からなぎなたを課

め、平成23年度から授業が実施されている。

また、岩手県では平成28年の国民体育大会開催を控え、一戸町で平成24年度から3校が授業を実施しており、平成26年の国民体育大会を終えた長崎県松浦市でも採択を検討していると聞いている。

現在、各都道府県連盟では、指導者を派遣するだけでなく、授業が必要となるなぎなたを貸し出し、積極的に関係機関への働きかけを行っている。

2 採択拡大に向けての課題

「なぎなた」は男女共修が可能な種目であり、特別に武道場などを準備せずとも体育館フロアなどで授業を行うことができる。用具も、なぎなたを人数分揃えることができれば十分であり、経済的な面でも優れている。

また、安全面においても、防具を着用しての練習に至るまではほ

んど怪我の心配がない。年10時間程度の実施状況を考えれば、かなり安全性が高いといえる。

さらに、防具を着用せずとも、演技を試合形式で行ったり、「リズムなぎなた」の発表をおこなったりすることで成果発表の機会を持つこともできる。

このように多くの利点を持つ「なぎなた」の採択が、進まないのは何故だろうか。

課題を整理してみると、概ね次の3つの点に集約できるのではないだろうか。

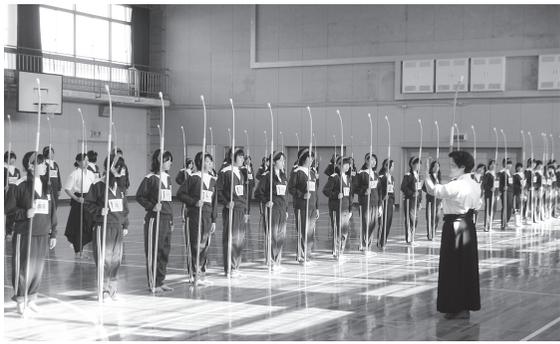
- ① 認知度の低さ
- ② 指導者の不足
- ③ 指導法への不安

①については先にも触れたが、生徒・保護者はむろん、教員・学校関係者でも多くが「なぎなた」に対する予備知識がない。認知度の向上、及び認知度の低さを利用した興味付けを行う必要がある。

②については、人口の点で剣道・柔道に比べると劣っており、必然的に専門の保健体育科教員を全ての学校に配置することは望めない。よって、外部指導者の活



伊丹市での授業全体風景②



伊丹市での授業全体風景①

外活動として行っていた学校や専門教員が所属する学校、全国レベルの大会が開催される地域の学校等が主となっている。現在、その周辺校へと、少しずつだが、採択校が増えている状況である。

このような現状において特筆すべきは、兵庫県伊丹市の実施状況である。伊丹市では、市が「なぎなた」採択を決定し、市内全ての中学校で授業を実施している。

伊丹市には江戸時代から続く、日本三大私設道場（町人たちの自衛のために設立された道場を起源とする道場）の一つである「修武館」があり、ここでは「天道流」なぎなたが伝承されている。公益財団法人全日本なぎなた連盟の本部も設置され、「平成18年のじごく兵庫国体」なぎなた競技の会場となった。現在では毎年3月に「全国高等学校なぎなた選抜大会」が開催されている。

このように、「なぎなたのまち伊丹」というバックグラウンドを持つていたこともあり、市の関係機関の理解と協力を得ることができた。平成21年度から研究を始

用、指導者の育成を両輪で進めていく必要がある。

③については、「なぎなた」採択に興味をもった教員が不安なくスムーズに授業を行えるように指導法を具体的に提示し、研修を行い、現場の声を吸い上げて対策していかなければならない。

3 対策

前項に挙げた課題に対しての対策を紹介し、検討したい。

①「認知度の低さ」の対策として、本連盟の普及委員会では、なぎなた未経験者に対する「なぎなた」の紹介を目的としたDVDの作成に取り組んでいる。また、各都道府県連盟では、中高連携事業の一貫として出前授業を行っている。独自の取組も多く実施している。

②「指導者の不足」については、まず外部指導者の派遣については、より一層、なぎなた人材バンクのシステム化を図りたい。現在は、連盟から外部指導者派遣について教育委員会や学校に提案するか、教育委員会側からの依頼を受けて外部指導者を推薦するという方式をとっているが、よりスピーディーに対応することが重要である。また、研修会等を通して外部指導員の指導スキルの向上を図っていかねばならない。

同時に現有指導者の活用だけでなく、指導者の育成にも取り組んでいきたい。具体的には、全日本学生なぎなた連盟や個々の大学と連携し、「なぎなた」に関する知識のある教員の育成を進める。また、「なぎなた」の経験のない保健体育教員を集めて指導・研修を行う等が考えられる。

「なぎなたに興味のある教員を集めて研修」という従来の方式では、興味自体を持ってくれる教員がなかなかおらず、人数を集められないのが実状である。

また、地域で開催されている武

道指導者講習会は剣道・柔道が主となっている。全国なぎなた指導者研修会の要項などを各都道府県教育委員会等に送付しても、それぞれの都道府県で扱いが異なり、個々の教員にまで連絡が届いていないケースも見られる。

各教育委員会になぎなた講習会への参加について陳情することや、教員養成課程で武道全般を広く学ぶ講義を義務付けたり、既卒者の研修として専門外の種目の講習を義務付けるなどの方法を提案していくことが必要であろう。

③「指導法への不安」については、全日本なぎなた連盟では、平成20年4月に普及委員会を中心に中学・高等学校の教員で組織する「中学武道（なぎなた）必修化プロジェクト委員会」を立ち上げ、平成22年3月に『楽しいなぎなたの授業 指導の手引』を作成した。

また、教員が自分の専門でない種目を担当し、指導する課程を考えて、視覚的な理解を促すため、同手引の付録DVDも作成した。

平成24年にはさらに基礎編を入れた『楽しいなぎなたの授業 指導の手引 改訂版』を発行した。

平成23年には今浦千信氏が「指導教本のねらいと活用のポイント」について本誌・月刊「武道」2011年9月号に寄稿している。

平成24年度からは、全国なぎなた指導者研修会の目的別実技研修に「武道必修化」を含めた。基調講演も武道必修化を意識した立案を行い、平成24年度には「リズムなぎなたの創作のヒント」と題した講演で、なぎなた授業のヒントを提示した。

また、本年度（平成27年度）は、研修項目として外部指導者とのT・Tや外部指導者のあり方を取り上げる予定である。

授業実践に関しても、本誌・月刊「武道」2009年9月号の大野京子氏（大阪府富田林市立葛城中学校）を始め、2010年2月号に稲永優子氏（福岡県須恵町立須恵中学校）、2010年7月号に山中美智子氏（大阪府河内長野市立加賀田中学校）、2011年3月号に片庭江美氏（東京都大田区立馬込中学校）、2013年3月号に小倉洋子氏（群馬県みどり

表1 中学校武道授業でのなぎなた採択校（平成26年度）

都道府県名	中学校名	指導者の配置方法 (○)				時間数 (時間)	用具の設備		備考
		学校教諭 連盟指導者	特別非常勤 講師(退職 教員採用)	連盟指導 者派遣	なぎなた		防具		
青森	青森山田			○		有	無		
	一戸町立奥中山	○			15	有	有	町教育委員会	
	一戸町立一戸	○			30	有	有	町教育委員会	
宮城	一戸町立小鳥谷	○			16	有	有	町教育委員会	
	仙台育英秀光	○			12	有	無		
	聖ウルスラ学院中等部			○	週1	有	無	退職職員	
福島	仙台市立山田			○	18	無	無	なぎなた連盟準備	
	県立会津学鳳	○			8	有	無		
	会津若松ザベリオ学園	○			6	有	無		
	会津若松市立一箕		○		5	無	無	連盟よりなぎなた持参	
茨城	会津若松市立第二		○		6	無	無	連盟よりなぎなた持参	
	常陸大宮市立緒川				8	無	無	常勤講師と連盟指導者	
	栃木	○			20	有	無		
群馬	館林市立多々良			○	8	有	無		
	太田市立生品		○		18	有	無		
	我孫子市立久寺家		○		20	有	無	連盟でなぎなた用意	
千葉	我孫子市立布佐		○		20	有	無	連盟でなぎなた用意	
	君津市立君津		○		20	有	有	スネ当	
	勝浦市立勝浦		○		10	有	有	指導：連盟会員	
	愛国学園	○			12	有	有	スネ当	
東京	文化学園大学杉並	○			週2	有	有		
	鷗友学園女子中学校	○			9	有	無		
	南多摩中等教育学校	○		○	20	有	無		
神奈川	鎌倉女子大学中等部	○			週1	有	無		
	山梨	玉幡			8	有	有	学校講師	
富山	下部			○	8	有	有		
	福野				12	無	無	指導：部活動指導講師	
	京都	ノートルダム女子		○	15	有	無		
大阪	木津川			○	20	有	無		
	泉川			○	20	有	無		
	市立矢田南	○			10	有	無		
	市立大池	○			6	無	無	なぎなた汎愛高校より借用	
兵庫	堺市立南八下	○			10	有	無		
	堺市立金岡北	○			8	有	無		
	堺市立三国ヶ丘	○			8	有	無		
	河内長野市立南花台	○			8	有	無		
	河内長野市立加賀田	○			8	有	無		
	神戸国際				15	有	無	非常勤講師	
	園田学園	○			8	有	無	教育委員会事務局職員	
	伊丹市立東	○			10	有	有	〃	
	伊丹市立西	○			10	有	有	〃	
	伊丹市立南	○			10	有	有	〃	
伊丹市立北	○			10	有	有	〃		
伊丹市立天王寺川	○			10	有	有	〃		
伊丹市立松崎	○			8	有	有	〃		
伊丹市立荒牧	○			8	有	有	〃		
伊丹市立笹原	○			8	有	有	〃		
和歌山	九度山		○		10	有	有		
	河根		○		8	有	有		
島根	出雲北陵	○			6	有	無		
岡山	真庭市立落合		○		8	有	無		
	比治山女子	○			8	有	有		
広島	8校実施	○			3	有	無	山口県体協嘱託職員	
香川	琴平		○		15	有	無		
	丸亀南		○		7	有	無		
愛媛	松山市立北条南		○		10	有	有		
	松山市立高浜		○		20	有	有	指導：外部講師	
	松山東雲学園			○	33	有	無		
高知	県立高知南	○			6	有	無		
	中村学園女子	○			5	有	有		
福岡	佐賀市立川副		○		12	有	有		
	小城市立牛津		○		10	無	無		
宮崎	鵬翔	○			9	有	無		



平成26年度指導法研究事業 研究協議②



平成26年度指導法研究事業 研究協議①



『なぎなた安全指導——安全に、正しく、楽しく』

市立笠懸南中学校)が、なぎなた授業の実践報告を行い、検討資料として提示している。

安全対策については平成26年5月に『なぎなた安全指導——安全に、正しく、楽しく——』を発行し、なぎなたの利点である安全性をより確かなものにするための方法を提示している。

本連盟普及委員会では、このような事業・研修を通して、現場における疑問や不安を軽減できるように資料の提示・検討・実践指導を行っている。

次項では、その事業の一環として日本武道館研修センター(平成25年度)、日本武道館(平成26年度)にて開催された中学校武道授業指導法研究事業の実施報告を行う。

4 中学校武道授業指導法研究事業実施報告

(1)平成25年度中学校武道授業指導法研究事業(平成26年1月17日～19日)

〈1日目〉

三藤芳生日本武道館理事・事務局長の「必修化2年目を迎え、なぎなたの採用校も58校と増加傾向にある。なぎなたのすばらしさ、在り方を全国へ伝え、より一層の採用校増加、なぎなた人口の増加を期待する」という挨拶で開会。指導の際の不安や指導法についての研究協議を行う。

〈2日目〉

勝浦市立北中学校の生徒12名の協力を得て、モデル授業を行う。T・T形式で2時間分。しかけ応じの基本動作をチーム対抗リレー方式で行うなど、「生徒と一緒に授業を楽しむ」を重視した実践。午後はモデル授業の振り返りを行う。

〈3日目〉

2日間のまとめ。手引き作成時の原点に戻り、専門用語を多用せず、教育にあつた表現を検討。また、生徒の理解を図るための教員の動作の検討。閉会式では、畠瀬美佐子全日本なぎなた連盟専務理事が「課題解決しながら中学校の授業で必要なことは何かを検討し、努力していきたい」と講評を述べた。

(2)平成26年度中学校武道授業指導法研究事業(平成27年1月24日～25日)

〈1日目〉

三藤氏が「武道授業の実施時間が10時間と限られている。指導内容の絞り込みが必要。(さらに)現場の保健体育科教員が指導してみたいと思えるような環境設定が大事になってくる」という方向性を示し、研究協議に入る。

「なぎなた」採用促進のアイデア等について検討。女子体育教員へのアピールの必要性、外部指導者の活用の推進、ダンス授業との合

5

今後への期待

「なぎなた」の授業を受けた生徒の反応は非常に良好である。大きな声を出すこと、打突音の快さ、見たことのない競技、初めは面倒くさがついていた生徒も授業が進むにつれて能動的に活動するようになる。

また、大野京子氏の授業報告(月刊「武道」2009年9月号)にもあるが「なぎなた」に対する興味だけでなく、「なぎなた」を通して生活全般に好影響が見られる。

私が以前、出前授業を行った際にも普段は万事たらたらと無気力に過ごしている生徒が、大きな声を出して率先して動き、丁寧な物を扱い、じっと相手の目を見て礼をしていた。この変化を見た中学校担当教諭が非常に驚き、感心していたことが印象に残っている。

残念ながらこのときは単発の授業であったが、経験のない中学校の



平成25年度指導法研究事業 モデル授業



平成25年度指導法研究事業 研究協議

先生に「なぎなた」の魅力を感じてもらおうことができたのではないだろうか。このような先生方に継続して関わってもらえるようにしていくことが、「なぎなた」採択拡大への鍵であると考ええる。

2020年の東京オリンピックに向け、世間はスポーツに対する関心が高まっていくことが予想される。オリンピック種目でない「なぎなた」が、どのようにこの波に乗っていくか。それは、普及に対して情熱を持った品格ある指導者を、どのように育成していくかにかかっている。

畠瀬専務理事は、日本武道館開館50周年記念特別座談会「武道界の50年と将来展望」で、「一番重要なことは指導者自身が中学生に大事なことを伝えることのできる品格をもつことではないか」と述べている。

武道授業は、日本文化の美点の一つである「品格」を、次代に伝える役割も負っているのではないだろうか。